

オドリーコ・ダ・ポルデノーネの東方¹

高田 英樹*

Orient of Odorico da Pordenone

Hideki Takata*

キーワード

オドリーコ・ダ・ポルデノーネ マルコ・ポーロ 中世東西交流史

0. はじめに

「紳士淑女の皆さん、いと若かりし頃私は、上司から日の現れるところに派遣され、ポルチェッラーナの特許状を手に入れるべく努めよとはっきりと申し渡されました」

とこのように述べて、チポッラ修道士が自分の東方行の話を持ち出していることはすでにみた²。フィレンツェは聖アントーニオ教団のこの修道士は「ヴェネツィアから出発し」、コンスタンティノープル、バグダード、そしてインドやセリカ（カタイ）と覚しき地を巡って故郷に戻ってくる。『デカメロン』百話の中でも最も秀逸なものとして知られるこの話（第6日第10話）には、古くからの東方伝説や十字軍時代の聖地巡礼案内、そして当時の修道士たちの東方布教記やマルコ・ポーロら商人の旅行記が下敷きにされていることが知られるが、ではこのチポッラ修道士自身のモデルを探すとすれば誰になるのか。

こうした話には唯一特定のモデルがあるわけではもちろんないが、あえてもし今にも知られている人たちの中に求めるとすれば、ウーディネのフランチェスコ会士オドリーコ・ダ・ポルデノーネが最もふさわしい。

13世紀後半から14世紀前半、いわゆる「パークス・タタリカ」のもとで西方から東方に渡った修道士は数多い。が、中国にまで至った者で報告記が知られているものに限れば、13世紀のカルピネとルブルク、モンテコルヴィーノと数人の同僚たち、14世紀のオドリーコ、そして最後のマリニョッリとなる。いずれもフランチェスコ会士である。このうち、カルピネの「モンゴル記」はすぐヴァンサン・ド・ボヴェの大百科辞典『スペクトルム・マイオル』（大鑑）に採録されて広く読まれた。その記は間接的にせよボッカッチョにも影響を与えているであろうが、100年前(1245-47)のことである。すぐ後のルブルクの「モンゴル人の歴史」(1253-55)は、派遣主であるフランス王ルイ9世に提出されたため流布せず、後々まで知られるところとならなかった。モンテコルヴィーノは最も長く中国に滞在し(1294-1328)、かの国におけるカソリック伝道の礎を築いた人であったが、まとまった旅行記は残していない。最後のマリニョッリも旅は長かった(1338-52)が、その手記は

*たかた ひでき：大阪国際大学人間科学部教授〈2004.6.30受理〉

『ボヘミア年代記』（1355）に挿入されているだけである。しかも、『デカメロン』（c.1348-53）より後になる。

オドリーコがヴェネツィアを発ったのは1318年頃、インド・中国を回って帰国したのが1330年、同年に口述した旅行記はすぐ知られるところとなり、マルコの書を上回る人気を博したという。その写本の一つをボッカッチョが目にしたとて不思議ではないし、東方に関心・関係とも深かったかの作家はおそらく大いに興味をそそられたことであろう³。

そうした年代的一致だけではない。内容的にも、どちらかといえば軽く俗っぽい全体的な調子は、あのチポッラ修道士の諧虐的な話とよく合い通ずる。彼の旅行記は、聖職者の手になるものであったにもかかわらず、一言でいえば「驚異譚」である。チポッラ修道士の話もまた、「驚異と幻想」の東方をからかい戯画化したものであった。

さてオドリーコ修道士もまた、「上司の許可を得て」ヴェネツィアから出発する。では、彼の旅とはどのようなものであったか。その中で東方はどのように見られ記されているか。それまでの東方と同じなのか違うのか、違ふとすればどう異なっているか。

1. 旅と記

最初に簡単な序文がある：「この世の習わしと在り様については沢山の人々によって多くまた様々に語られているが、私フリウーリのオドリーコ修道士もまた、靈魂の果実をいくつか獲得せんがため、海を渡って不信の徒の地に赴かんとして、くまた我が教団の会則にのっとって与えることのできる我が上長たちの許可のもとに⁴、多くの大なること驚くべきことどもを聞きかつ見たこととて、それをあるがままに語らんとするものであることをご存じありたい」（1）⁵

彼の書のどこにも東方のみならず世界の、地理にしる歴史にしる文明にしる全体像が記されているわけではないが、この短い序文にオドリーコの世界像は明らかである。「この世」は、ヨーロッパ・キリスト教世界とその外にある「不信の徒」の世界、すなわち非キリスト教世界に分けられる。前者キリスト教徒とりわけ自分たち聖職者の使命は、後者非キリスト教徒の靈魂を救済し、来るべき終末に備えてこの世に神の王国を実現することである。したがって非キリスト教世界である東方は、その靈魂の救済つまり宣教の対象として存在する、と。事実、修道士オドリーコの旅の目的もまたそれ「靈魂の果実の収穫」である。ところが、語るのは見聞した「大なること驚くべきことども」だという。これはどういうことであろうか。

その旅は、アナトリア半島から始まってペルシャ・インド・東南アジア・中国そして帰路は内陸ルートと、15年をかけてユーラシア大陸を一周したもので、逆回りではあったがルートにおいても年月においてもマルコに劣らぬものであった。その大旅行でめぐった各地の地理・歴史、民族・政治・宗教、産業と商品などに、オドリーコも一応は触れる。ところがそれはほんの一言か二言であり、この修道士が主に筆を費やすのは、事実そこで目にし耳にした数々の驚異である。しかしこの書がものされたのは1330年、東西の往来はさほど稀なものではなくなり、とりわけ布教に携わる宗教人にとっては東方はもはや未知ゆえの「神秘と幻想」の地ではなくなっていたはずである。それに、30年前に書かれたマル

コの手をばじめとして、東方についての情報は徐々にながらも増え、その現実も何かと伝わり始めていた。ではいったい、何が「驚くべきこと」だというのか。

オドリーコの旅は四つの行程と地域に分けられる。往路トレビゾンダからオルムズまでの西アジア、そこから海路渡ったインドと東南アジア、中国、そして帰路の内陸アジアである。記される内容と調子ははっきりと異なる。以下、ごく掻い摘んでたどる⁶。

1.1 西アジア

アナトリア半島からシリア・ペルシャにかけての西アジアは、ヨーロッパにとっては、古くは新旧の聖書、ギリシア・ローマの歴史、アレクサンデル伝説に語られ、新しくは十字軍の遠征、宣教師の伝道、商人の進出によって伝えられてきた長く深いつながりをもつ地であった。東方への伝道を託されたフランチェスコ会に属するオドリーコもまた、この地域については、それが伝説であれ事実であれそうした知識を十分に持ち合わせていたはずであり、事実彼の記述はその域をでるものではない。

1.2 インド・東南アジア

インドは、ヨーロッパ人にとってはなによりもアレクサンデル大王の遠征の地であり、中世のその伝説に伝えられる「神秘と幻想」「怪奇と野蛮」の本場であった。そこに足踏み入れたオドリーコは、現実がそのとおりでであることを報告する。まず人間の驚異であり、彼から見れば未開で野蛮なたいいはおぞましい風習の数々である。

その人間の驚異に対比されるのが自然の驚異であり、人間の醜さと精神の貧しさに対する、自然の美しさと物質的な豊かさである。一方、これら人間と自然の驚異に対して、政治や社会についての記述はごく少ない。西アジアでは主たる情報であった、古くからの伝説に基づく記事は、当然ながらさらに少ない。

これらに対して、新たに登場するのが、こうして東方に渡ってきた修道士たちによって証言されるキリスト教の驚異であり、それによって示される「驚くべき神の御業」である。

1321年4月、おそらくオドリーコがやってくる直前か前の年、タナでは4人のフランチェスコ会士が殉教していた。彼らが投宿した家で夫婦喧嘩があり、その証人となったことからサラセン人司教との間で宗教論争となり、議論に負けたイスラム教徒側は火の試練に訴えた。ところがこれらキリスト教修道士が無傷のまま火の中から生還したので、自分たちの律法の権威が失墜することを恐れたイスラム教徒は、武器で彼らを殺害した、というものである⁷。この時4人の修道士の身の上起こった数々の奇跡と、彼らの遺骨を中国に運んでゆく途中オドリーコ自身が経験したという三つの奇跡が長々と綴られる。もっともこの記事は、短い覚え書き程度の他の各章と較べて著しく長く詳しく、文体的にも釣り合っていない、口述時ではなく後の編集段階での追加が疑われる⁸。

こうして「異教」東方は、キリスト教ヨーロッパにとって、布教の代償としての殉教すなわち宗教的迫害と受難の地という、負の一項目を付け加えることとなった。

1.3 中国

中国もまた驚異の地であった。しかし、インドと東南アジアが「アレクサンデルの驚異」であったとすれば、中国はいわば「プレスター・ジョンの驚異」である。その伝説では、東方にある司祭王プレスピテル・ヨハネスの国は、領土は廣大無辺、富は莫大無限、豊かな自然と多様な人種を誇り、しかも徳高い君主によって正義に則った完璧な政治が行われていた。オドリーコが中国に見たのは、あるいは見ようとしたのは、まさにこのヨハネスの国である。事実、中国はそのとおりだった。国土は廣大、人口は無数、自然は豊か、産物は豊富で安く、富は莫大、人間は多様でしかも高い倫理性を備えており、社会は秩序立っていた。ただ、国民はキリスト教徒ではなく偶像教徒であり、再発見された実在のヨハネスタるグラン・カーンも、絶大な力と富と高い徳を有する理想の君主ではあったが、「プレスピテル」(司祭)ではなかった。そこで、彼らの改宗に全ての期待がかけられることになる。

この中国の驚異は、何よりも皇帝グラン・カーンとその宮廷によって代表される。本書の中心をなすのもこの部分である。しかしながら、「プレスピテル・ヨハネスの書簡」でも、その支配下にある東方の王国について誇られるのはもっぱら現世的・物質的な豊かさであったが、オドリーコの中国の場合も、同じく領土の広さや物資の豊かさ、その皇帝の無限の富と力の驚異である。中国の文明や歴史、グラン・カーンの人物や統治が記されることはついにない。

1.4 内陸アジア

帰路の内陸部、といってもその行程が順にたどられるわけではなく、ほんの二、三の地についての見聞と宗教的な体験、それに中国での回想的な追加記事があるのみである。順序も前後しており、まとまった記述とはいいがたく、旅行記としては中国の部で終わっていると見てよい。またこの行程では再びかつての伝説や未開と野蛮の驚異が登場する。

最後にもう一つの体験「グラン・カーンとの出会い」のエピソードが追加される。上都から大都に戻ってくる皇帝を、会士たちとオドリーコも十字架を掲げ賛美歌を歌いながら出迎えにゆくと、「彼は我々の声を聞きつけて呼び寄せ、そのもとに来よう招いた。…我々が彼のもとに行くと、彼はすぐにその毛皮の帽子、あるいはどれほどの価値があるか計り知れない冠を脱ぎ、十字架に敬意を表した」(38)

このエピソードの細部の真偽は決しかねるが、こうして旅行記は終わり、最後に、真実を語るとのオドリーコの「宣誓」と、筆録者グリェルモ・ダ・ソラーニアの「後書き」がある。これについては後述する。

2. オドリーコの東方

1318年、オドリーコがヴェネツィアを出発した頃、4年後に彼も世話を受けることになるザイトン(泉州)のペッレグリーノ・ダ・カステッロ司教によって認められた書簡が残っている。13世紀後半から14世紀前半、ユーラシア大陸の大半がモンゴル帝国下にあった時代、いわゆるその「平和」のもとで東西の往来がいかに活発であったか、どれほど多く

のヨーロッパ人が東方に渡ったかが、中国での布教の状況をヨーロッパの教団本部に伝えるその短い報告からもうかがえる⁹。その大部分は彼ら修道士であり、もう一団はそれに同行した商人たちであった。彼らにとって東方は、当然ながらもや未知ゆえの「驚異と幻想」「怪奇と野蛮」そのままではありえなかった。モンテコルヴィーノも書簡の一つに書いている。インドで「驚くべき人間、すなわち他とは違った人間、また動物、そして地上の樂園について私は大いに尋ね探したが、何も発見することはできなかった」と¹⁰。

こうして、かつての東方のイメージを構成していたいくつかの項目が消えてゆきつつあった。最初に西方からユーラシア大陸を横断したカルピネ（1245-45）はまだ出会った犬人や一本足人などの妖怪変化は姿を消した。プレスビテル・ヨハネスはすぐ次のルブルク（1253-55）によって、ネストリウス派キリスト教徒の誇大宣伝であることが暴かれたし、マルコは、かつてタルタル人の王者であったがチンジス・カンによって滅ぼされたウン・カンに同定した。麻薬を使って暗殺者を遣わすという山の老人は、かつて実在していたがモンゴル人によって滅ぼされたことが分かった。地上樂園の四つの川はまだ流れていたが、樂園そのものはどこにも発見されなかった¹¹。

かといって全てが明らかにされたわけでも、現実が真実としてそのまま認識されたわけでもない。オングトのキリスト教王ジョルジオはやはりプレーテ・ジャンニと呼ばれたし、ゴグ・マゴグはまだ姿を消していなかったけれどもカタイの北には発見されず、さらに北方かアフリカのエチオピアへと移動しつつあった。地上樂園もこの世のどこかに必ず存在しているはずであった。それに、ノアの方舟、乾いた樹、東方の三博士、使徒聖トマスら旧新の聖書に語られる伝説、アレクサンデルの東征や十字軍遠征など古代から中世にかけての歴史に基づく伝説があった。つまり、古くからの東方像を構成するそれら諸項目はまだ十分な効力をもって生き残っており、全体的な枠組みそのものは変わっていなかった。「自なるもの」であるヨーロッパ・キリスト教世界とその外にある「異なるもの」、すなわち宗教的には「異教」、文化的には文明なき「異郷」つまり未開の世界である。その例には事欠かない。

同じ1318年頃、『神曲』を書き終えつつあった当代最高の知識人ダンテにとってすら、東方はどのようなものであったかは別の稿でみた。東の果てはインドであって、カタイと呼ばれる中国のあることは知らなかった、あるいは知っていたとしても自分の地球像には採用しなかったし、東方には地上樂園はなさそうだということに気づいたのか、それを南半球の淨罪山の上に置いた。胡椒や絹が東方からくることは知っていたが、そこにどんな人間が住んでいるか、どんな文化があるかは知らなかった。そこで彼は、キリストは知らないが自分たちヨーロッパ人と同じ「理性」を備えた一人の無垢のインド人を登場させて、キリスト教の伝道と靈魂の救済を待ち受けさせた。つまり東方は、ヨーロッパ・キリスト教世界を中心とする世界の周縁に位置し、宣教と救済の対象として存在するのであった。

東方の様々な新たな現実が当時の修道士や商人たちによって数多く詳細に伝えられ始めても、この枠組み自体は変わることはない。否それどころか、その枠組みの中に詰め込まれ、それを補強し例証する実例を増やすのに役立つのである。修道士オドリーコの東方も、まさにそのようなものである。

トレビゾンダからオルムズに至る西アジアは、ヨーロッパにとっては歴史的に関係の深い地域である。この行程ではオドリーコの東方もまた、ノア方舟、乾いた樹、地上天国の四川の一つエウフラテス、東方の三博士、砂の海、バベルの塔と、古くからの伝説に伝えられた東方そのままである。その間に統治や商品の新たな情報が挟まれるが、ごく僅かでしかも短く、ほとんど意味をもたない。宗教的には、もはや相容れぬ教敵イスラム教徒の支配するところであり、布教活動には一言も触れていない。

インドと東南アジアは、古くアレクサンデル伝説以来の東方のイメージ「未開と野蠻」そのものであった。オドリーコは、かつては未知ゆえに空想のものであった「驚異と幻想」「怪奇と野蠻」が現実そのものであることを証言する。自然も人間もそうである。珍しい獣、巨大な樹、猛暑、裸体の住民、莫大な金銀宝石、世界最大のルビー、妻の共有、入れ墨、何百人の妻と子をもつ王、無数の象、巨大な亀、自ら岸に押し寄せる魚の群れ、危険な海、妻の殉死、胡椒の森、種々様々な香料、豪華な宮殿、毒の樹、パンの樹、護身の石、人肉食、子供の売買、奇妙な風習、忌まわしい習慣、等々。

宗教的にも同じである。火や蛇や樹木をあがめる「偶像崇拜教徒」、雄牛崇拜、乙女の生鬘を求める半人半牛の偶像、純金製の巨大な偶像とおぞましい巡礼行、危険な苦行。ドンディン島の父子・夫婦が互いの肉を食べ合う醜悪な風習について、なぜそのような「犬ですらしないうような」「理性に反したことをするのかと尋ね、死者の肉が「うじ虫に食べられたら靈魂が苦しむからだ」との答を受けたオドリーコは、「彼らは他の教えを信ずることもその風習を止めることも欲しない」と、匙を投げる。それらに対して、タナでの4人のフランチェスコ会士の殉教とそれにともなって起こった数々の奇跡を、キリスト教の「神の驚異」として対置する。

一方、新たに発見された中国は、インドや東南アジアと違って確かに未開ではなかった。それどころか、その自然・国土・人口・物資・宮廷・国王、その富と力、社会と組織においてヨーロッパの規模をはるかに上回っていた。東方にあって無限の領土と莫大な富を有し、正義と倫理に則った理想の政治の行われるという、司祭王プレスピテル・ヨハネスの国の再発見であった¹²。ところが、この国の住民も偶像崇拜者である。裏山に住む猿や類人猿を「人間の靈魂」だというその僧侶に対して、ここでもオドリーコは、「いくらでも反駁できたが、彼は他のことを信じようとしなかった」と、それ以上の反論と攻撃を控える。それに、実在のヨハネス、グラン・カーンはキリスト教徒ではなかったが、カソリック教を保護し、フランチェスコ会は宮廷内にあてがわれた席までもっていた。そこで彼らはこの大君の好意にすぎり、その改宗に期待する。現に行幸の途次、グラン・カーンは彼らに目を止めて呼び寄せ、「冠を脱いで十字架に敬意を表した」ほどである。このグラン・カーンは、さしずめダンテの期待した「インド人」に当たるものであろう。新たに接触の始まった中国は、こうして布教の対象としての存在を強める。

と同時に、商売の対象でもあった。修道士たちの東方行は、名目は「靈魂の獲得」すなわち宗教的開拓であったけれども、「富の獲得」すなわち商業的開拓に協力したことは疑いない。1305年グラン・カーンの宮殿の門前に教会建設の敷地を買ってモンテコルヴィーノに寄贈したロンバルディア人、ピエトロ・ダ・ルカロンゴが名高いし、ザイトンでは一

人のジェノヴァ人が同司教区の会計係兼顧問をしていたことが知られている。彼らの数は修道士に劣らず多かったと見られるが、商売柄手記やメモを表に出さなかった¹³。聖職者オドリーコも、各地の特産品やその値段まで記して商業情報を提供していた。

帰路の内陸アジアは、以上のような様々な東方像の寄せ集めである。昔の伝説に属するものでは、プレスビテル・ヨハネスの現実と山の老人の末路が明らかにされる。野蛮の驚異としては、カデリ王国の羊を妊む巨大なメロンと、チベットの死者を弔う奇習があった。そして最後に、大タルタリアでの悪魔祓いと、恐怖の谷からの生還の実際の体験が、神の恩寵として示される。それは、東方におけるキリスト教の勝利と、それによるいつの日かの神の摂理の実現を期待するものとなる。

オドリーコがこの旅の報告を提出する10年前の1320年頃、ドメニコ会の修道士ピピーノが教団の命令でマルコの旅行記をラテン語に訳していた。その序文でピピーノは、労多きその仕事の意図を次のように述べる：

「私は…人々が本書を読むことにより、神から多くの恵みの加護を賜ることができるであろうと考えた。なんとなれば、神のかくも驚くべき御業を見て、その御力と御知恵に彼らもさらに驚嘆の念を覚えることができようからである。また、かくも多数の異教の民が、かくも多くの盲目と失明、かくも多くの汚濁に満てるを知って、キリスト教徒は、己が信徒を真実の光で照らし、有り難くもかくも危険な暗闇から救い出さんとなし給い、その嘆ずべき栄光の御光の中へと導き給う神に感謝するだろうからである。はた、そのキリスト教徒が、かの異教徒どもの無知に同情と哀れみを覚え、彼らの心を啓き給うよう神に祈るだろうからである。はた、多くのキリスト教徒が真の神を敬うよりも不信の民草が偽りの偶像を敬いがちなのをみて、本書によって信仰篤からぬキリスト教徒の硬さと頑なさが和らげられようからである。はたおそらく、いとも麗しき我が主の御名がかくも多くの民に知られざるを見て心を動かされ、キリスト教信仰を広めんがため、いく人かの聖職者たちがそれら不信の徒の盲目の国を照らすべく、その地に赴くだろうからである」¹⁴

オドリーコの報告を貫く精神も、これと同じものである。彼の語る「驚くべきことども」とは、ピピーノのいう「神の驚くべき御業」のことに他ならない。世界、万物は造物主たる神により造られたものであり、その御業がどれほど偉大なものであるかは、今まで知られなかった未知の世界を旅した者たちによって、ここに改めて示された。神によって造られたこの世に、非キリスト教徒が存在するのもまた神の御業である。それら異教徒が無知と暗闇の中に迷っているのを知って、我らキリスト教徒は真実の光に照らされて救われていることを感謝できるからである。また、彼らが偽りの偶像を崇拜するのを知って同情と哀れみを覚え、キリスト教徒は彼らも救われるよう神に祈らなければならない。さらには、真の神の名を教え盲目の国を照らすべくその地に赴くことこそ神に仕える者の使命である、と。オドリーコは、まさにその呼び掛けに応えた一人であった。

オドリーコにとって東方は、いまだ真実の光によって照らされぬ盲目の不信の徒の汚濁に満ちた地である。彼が最も注意深く観察し、記述するのも各地の信仰形態である。火・蛇・樹を崇拜するタナの偶像教徒、ポロンブムの雄牛崇拜、生にえを要求する半人半牛の偶像、モバル王国の無数の巨大な偶像とおぞましい苦行と巡礼、靈魂がうじ虫に食べられ

て苦しめぬようにと父の死体を食らうドンディン島人。文明化した豊かな中国も宗教的には同じである。ザイトンの偶像教徒は食べ物や神に供えるし、キンサイの僧侶は裏山に飼う猿を人間の靈魂の生まれ代わりだと信じる。

これらにオドリーコが、嫌悪の情隠し難くほとんど絶望しながらも、穏やかに反論するのに止めているのも、それに哀れみと同情を覚え、真実の光で照らさねばならぬ、彼らの靈魂を救わねばならぬという使命を自覚しているからであった。この異教との信仰にほとんど絶望視ながらも、そのたびに、彼らもまた自分たちと同じ「理性」を備えた人間であると記すのは、そのためであった。

オドリーコの報告記は、実際にもマルコ・ポーロの旅行記を下敷きとし、それにならって東方を記述し、そこにいくつかの新たな情報や記事を補ったものであったが、上のような意味では、宗教性は比較的希薄だったマルコの東方を再びヨーロッパ・キリスト教世界の東方観の枠組みの中にはめ込んだものといえるであろう。

そして、もっぱら「驚異」を語り世俗的な記事が大部分である点で同じだが、しかしはるかに簡単で分かりやすく、聖職者である筆者によって上にみたごとき宗教性が明確かつ強固に付与されることによって、マルコの書より信頼をもって受け入れられることとなる。20年後の『デカメロン』のチポッラ修道士のモデルに利用されたのではないかと考えられることは最初に触れたし、事実その後にはすぐ続くマンデヴィルの空想の東方旅行記(c.1360)にはそっくり丸ごと取り込まれる。マンデヴィルの書は、オドリーコを始めとしてカルピネ、マルコ、ヘトゥム、プレスビテル・ヨハネスの書簡、聖地巡礼案内など東方関係の書をつなぎ合わせた空想の旅行記であったが、当時もその後も長く真実の旅行記として信頼された。その書もまた、一言でいえば「驚異譚」であり、マルコやオドリーコの書にまさる人気を博したという¹⁵。

その同じ頃、東方では外国人に解放的だったモンゴル人の政権が崩壊して閉鎖的な明朝の漢人政権が成立し(1368年)、西方でもチムールとオスマントルコの勃興があって、東と西の直接的交流は途絶える。それによって、西方における東方のイメージもまた、オドリーコやマンデヴィルのままに定着してゆくのである。

3. 人と書

3.1 人

当時の多くの修道士の例に漏れず、その生涯は、旅行記にうかがわれることを除いて確かなことはほとんど分からない。以下、主に修道会の伝記、ユール・コルディエ、ムール、ウィングェルト、モナコらに基づいて整理すると次のようになる¹⁶。

生年は、最初は伝記作者たちによって1286年とされていたが、それでは1331年死亡時45歳となって若すぎることを、死の翌年制作された棺の彫刻では白髪の老人に彫られていることなどから、ユールらは1270—75年頃と考え、その後コルボヴィッチ(1917年)がさらに遡らせて1265年頃とし、今ではそれに落ち着いている¹⁷。

出生地は、大部分の写本に「Portus Naonis ポルデノーネ」とあること、他の記録にもその名が見えることから、同地が確実視される。フリウーリ地方、ウーディネとヴェネツ

ィアの中程にある小都市である。同地方は歴史的にラテン・イタリアよりゲルマン・ドイツと関係が深く、「Odoricus オドリクス」というそのゲルマン系の名前、いくつかの写本には「Boemus ボヘミア人」とあることなどから、13世紀後半同地の領主であったボヘミア王オットカールが、すぐ北のオーストリア領をめぐってハプスブルグのルードルフと争ったおり、カリンティア公兼ボルデノーネの君主であった従兄弟のウダルリックから譲られた同市を守備するために配した駐屯兵の子孫ではないかと推測されている。姓は「Mattiussi マッティウッシ」、生まれたのは市から1.5マイル離れた小村「Villa Nova ヴィッラ・ノーヴァ」とされるが、これはずっと後17世紀からの説で、どのような根拠があるのか詳かでない。

1318年頃東方に旅立つまでの記録はない。古い伝記では、ごく若くして入会したとされるが、これは1370年頃死の40年後に編まれたもので、死後数々の奇跡を引き起こしたと伝えられるオドリーコの一種の聖者伝の形をとっており、確かな記録とはみられない¹⁸。とまれその伝記によると、困難で質素な暮らしを送り、厳しい修行を積むばかりで昇進を望まなかった、また若い頃すでに奇跡を行った、という。

旅立ちは、その伝記に「東方に16年あった」とあり、帰国が1330年であることはほぼ確かなので、逆算して1314年とされてきたが、いくつかの稿本には「1318年出発」とあり、近年そのグループのテキストの信頼性が高まったこと、同地方の1317年の公文書にオドリーコの名の見えることなどから、最近では1318年説が有力となっている¹⁹。

東方行のいきさつについては謎のままである。旅行記には何も述べられていず、教皇や修道会から任命されたり派遣された形跡もない。資金についても明らかでない。そのため、一つには個人的・自発的動機と、もう一つには会から何らかの秘密の任務、おそらくは東方特に中国における布教の実情を調査しようとの任務を託されていたのではないかと推測されている。確かに、これほどの大旅行がただ個人的動機だけで行われたというのは考え難い。後の16世紀のイエズス会の巡察使ヴァリニャーノのような役割を担っていたのかも知れない。が、そうした調査報告書は残っていないし、その存在についての記録もない。また、すでにみたごとくその旅行記には、自分についても現地についても布教のことは一切触れられていず、意図的に除いたあるいは別の報告記に書いたという推測も不可能ではないが、帰国後の状況や、この旅行記が教皇庁にまで送られていることを考えると、その可能性は低い。

同行者が、部分的にかあるいは全行程にわたって、一人あったことが確認されている。アイルランド人ジェームズ Jacob d'Ibbernia 修道士であるが、旅行記にその名は挙げられていないし、手記も残っていない。また各地で修道院や教会で世話になり、様々な聖職者・商人と連れになったと想像されるが、彼らへの言及はない²⁰。この点マルコ・ポーロもそうであるが、中世の旅行記に共通する。

1330年に帰り着くまでの東方での行程と日程も、旅行記以外に記録はない。その書も、記録としては甚だ漠然としており、マルコ・ポーロの書のような詳細・正確さからほど遠く、年次としては、タナでの4人のフランチェスコ会士の殉教が1321年4月9日であることから、オドリーコの同地着はそれ以後、その遺骨を中国に運んでいることからそれから

そう遠くない時期、であろうことが推定されるだけである。とすると、1318年にヴェネツィアを発ってインド西海岸に着くまで少なくとも3年費やしており、途中アナトリアやペルシャで各地の布教活動を手伝っていたのではないかと考えられる。

そこからインド東岸・ジャワ・チャンパなどを経て、中国に入ったのはしたがって1322-24年頃と考えられる。陸路北上してカンバリクに着き、そこには「3年」いたと明記がある。1328年(陰暦7月)の皇帝イスン・ティムール(1323-28)の死にも、同年の大都大司教モンテコルヴィーノの死にも触れていないことから、首都を後にしたのはそれ以前と考えられるが、確かではない。修道会の伝記には「2万人」を洗礼したとあるが、もちろん疑問視される。

内陸部いわゆる絹の道を通してイタリアに帰り着いたのが「1330年」。1327-28年に大都を発つたとすると帰路も2、3年かかったことになる。そしてすぐの「1330年5月パドヴァのサン・アントニオ教会の小兄弟会修道院で、管区長グイドット師の命により、旅の報告をグリエルモ・ダ・ソラーニア修道士に口述した」ことが宣誓されている。多くの写本では続いて「1331年1月14日この世から主のもとに去った」ことが書き加えられている。

しかしその間にオドリーコが、当時アヴィニョンにあった教皇のもとに赴こうとしたことが、別の版と伝記から分かる。おそらく一つには旅の報告と、もう一つには東方布教のため中国への修道士の派遣を直接教皇に要請するためであった。あるグループのテキストには、「日々私はかの地に赴く備えをしており、そこで没する用意ができています」との一文がある。もう一つのグループは、50人の修道士を率いて再び東方に出発する許可を得ようとしていたことを伝えている。

ところが彼は、アヴィニョンに向かう途中ピーサで病に倒れる。その地で病の床にあったある日聖フランチェスコが雲に包まれて現れ、「自分の巢に帰るがよい」²¹と告げたので引き返し、ウーディネの修道院に運ばれたことになっている。すぐ翌年始めには亡くなっていることからして実際に病に陥ったのであろうが、それだけではないと見られている。

当時フランチェスコ会は聖庁と対立関係にあったことが知られる。清貧を尊ぶ同会、特にその厳格派(後に精霊派)が聖職者の世俗財産権を否定したためである。神聖ローマ帝国位をめぐる教皇と対立していたドイツ王ルードヴィヒ4世が1328年これを利用して、フランチェスコ会士ピエトロ・ダ・コルバーラPietro da Corbaraを対立教皇ニコラウス5世に立て、会の総長ミケーレ・ダ・チェゼーナMichele da Cesenaもこれを支持した。

オドリーコのアヴィニョン行きとピーサ立ち寄りもこの事件と何らかの関係があるのではないかと考えられている。ニコラウス5世は皇帝の後ろ盾なしにはローマにいることはできず、翌1329年始め、ピーサにいた皇帝の保護を求めて同地に逃れてきていた。そのためまたしても破門されたかつての帝国都市ピーサは、同年4月皇帝がドイツに去った後、この対立教皇を厄介払いした。オドリーコがピーサにきたのもその頃のことであった²²。

とまれそこで病に陥り、ウーディネに帰り、翌1331年1月14日に息を引きとった。1265年生まれとすれば65歳くらいとなる。死後数々の奇跡の起こったことが伝記に記される。40余年後の1755年(7月2日)にはベネディクトゥス14世によって福者に列された。ウ

ーディネの教会には、ヴェネツィア人フィリッポ・デ・サンクティスの手になるオドリコ
の像を刻んだ棺（1332年5月）と、旅を描いた後世の壁画が今も残る²³。

3.2 テクスト

今に伝わる写本の数はマルコに劣らない。ユールーコルディエ（1913）は76（ラテン語
50,俗語26）、ウインガエルト（1929）は98（ラテン語60,俗語38）、テスト（1982）は181を
数える²⁴。

写本は全体として三つのグループに分けられる。まず内容によって二つの種類に分かれ、
一つは全てのラテン語写本とその俗語訳であり、もう一つはかつてはユールによって「小
ラムージョ版」と名付けられ、近年では「トスカナ覚え書きMemoriale Toscano」と呼ば
れる一群のイタリア語写本である。これは前者ラテン語版の要約と見られるが、いくつか
の省略がある一方、それにはない興味深い記事を多く含んでいる。

前者ラテン語版はさらに、編者によって二つのグループに分かれる。1330年（あるいは
1331年以降）のグリェルモ・ダ・ソラーニャGuglielmo da Solagnaによるものと、1340年
のハインリヒ・フォン・グラルス Heinrich von Glars²⁵によるものである。グリェルモ版
（以下G）を第1グループ、ハインリヒ版（以下H）を第2グループとする。両者は、編者の
後書きを異にすることと、最後の数章の組み方が異なることを除けば、内容と構成の点で
は基本的・全体的にほぼ一致する。しかし細部の違い、とりわけ語句・表現・文体の異な
りは全般にわたっており、編者を異にするものであることをよく示している²⁶。

グリェルモ版には次のような「後書き」がある：「さて以上、私グリェルモ・ダ・ソラ
ーニャ修道士は、主の1330年5月パドヴァのサン・アントーニオにおいて、前述オドリ
コ修道士が自らの口でもって表したとおりに書き取った。難しいラテン語や飾った文体を
心がけず、書かれていることや述べられていることが誰でも易しく理解できるよう、彼の
語ったとおりに書いた」（38）

続いてすぐ次の一文が加えられている：「さて上述オドリコ修道士は、その後主の
1331年1月14日ウーディネの修道院にてこの世から主のもとにみまかった。そのあと多大
なる奇跡でもって輝いた」（38）

この二つの記述の時間的關係、1330年に口述筆記し、編集し終わったあとにオドリコ
の死があって最後の一文を追記したのか、全体の編纂も1331年初頭の死後に行われたのか
は、明確ではない。が、最終的な編纂は1331年以降であろうと考えられることは後でみ
る。

これに対して、ハインリヒ版にはこの後書きはなく、次のような「オドリコ修道士の
死について」の章で終わる：「さて祝福されたるオドリコ修道士は、主の1330年不信の
徒たちの地から自らの地つまりトレヴィーゾ地区に帰り来たったが、さらに至高なる教皇
ヨハネス22世のもとに向かわんとした。様々な地で集めた、自らそこに赴くことを志願
する50人の修道士を、海の彼方の地に信仰の種を蒔きに連れ行くことの許可を願い出んが
ためであった。で、生誕の地フリウーリを発ってピーサに来たるに、重い病に陥った。た
めに、自分の地に戻ることを余儀なくされた。そしてフリウーリの市であるウーディネに

来たって、主の生誕の1331年1月中日の前日 [14日]、この世の災いから、祝福されたる者たちの栄光へと去った。…私グラルスのハインリヒ修道士は、主の上記の年アヴィニョンの教主の庁にあって以上全てを書き写したのであるが、もし祝福されたるオドリーコ修道士について、彼と共にあった仲間たちからその多くの完全さと聖なる御業を聞き知っていなかったれば、ここに彼によって書かれてあることをほとんど信じることはできなかつたであろう。しかしながら、彼の生涯の真実からして、その語ることに信頼を寄せてしかるべきだと私には思われる。そして主の1340年の万聖節の頃、プラハにおいてこれらを記したのだが、アヴィニョンではこれよりも多くのことを耳にしたものである」(77)²⁷

ここから、ハインリヒ修道士は「1331年」アヴィニョンの聖庁にあったとき、そこに送られてきたオドリーコの報告記を「書き写した」こと、そしてそれを9年後の「1340年」11月頃プラハで書き直したことが分かる。しかし、彼が書き写したというのがどのようなものであったか、今に伝えられているようなグリェルモの版であったか、それともそのオリジナルの段階のものであったかは分からない。が、以下にみるいくつかの異なりがそのヒントとなる。

旅行記の部分は両版ともに、中央アジアの「恐怖の谷」での妖怪との対決の体験をもって終わる。が、グリェルモのG版ではその後、「グラン・カーンとの出会い」のエピソードがくる。そしてそれと、最後の前出「後書き」との間に、見聞した真実を語ることのオドリーコの「宣誓」がある：「私小兄弟団のフリーウリのオドリーコ修道士は、サン・アントーニオ管区長尊師グイドット修道士に対して、彼により求められたところに従い、上に書いたこれら全てのことは、私が自分の目で見たか信頼できる人々から聞いたものであることを証言し、証拠を述べる。また私が見たのではないことも、それが真実であることは、それらの地の共通の言い伝えが証言している。さらに私は、ここに書かせなかった他の多くのことを省略した。もし自分の目で目撃したものでないなら、ある人々にとってはまさにほとんど信じ難いことと見られるからである」(38)²⁸

一方ハインリヒのH版では「恐怖の谷」の後、真実を語ることの「宣誓」次いで「グラン・カーンとの出会い」と、G版と順序が逆なうえ、その出会いのエピソードが、「私小兄弟団のマルケジーノ・ダ・バッサーノ Marchesini da Bassano」が、生前にオドリーコ修道士から直接聞いたものであることが明記されている。このことは、ハインリヒがアヴィニョンで転記した原本にはこの記事が、マルケジーノ修道士がオドリーコから聞いた話として記されていたであろうことを意味する。とすると、パドヴァで筆録したり協力したのは、グリェルモ・ダ・ソラーニャー人だけではなくたことが予想される。彼はその主たる一人だったのかも知れないが、後に編纂に当たった折り、マルケジーノ・ダ・バッサーノの名を消し去り、自分がオドリーコから直接聞いたこととしたことが疑われる。となると、最終的編纂は1331年のオドリーコの死より後になる。

さらにG版では、最後の「後書き」の前に、大カーンの威光の前にひれ伏すスルタンの姿を描いた「皇帝の力について」なるもう一章が挟まれているが、陳腐な手口でサラセン人をおとしめるこの記事は、ほぼ確実に後世の加筆と見なされる。

グリェルモとハインリヒのテキストとのこうした異なりがどこから生じてきたのか、両

版の関係は明らかではない。ユールは、ハインリヒの方をオドリーコの口述により近いと考えたが、その理由は特に述べていない。ウィンガエルトは、グリェルモの方が年代的に早いことからそれを優位に置いた。しかし最近モナコは次のように推定している²⁹。

1330年春頃帰ってきたオドリーコの口述が5月にパドヴァで行われ、グリェルモ・ダ・ソラーニアが筆録してラテン語で書いた。これは確かである。これを原本とする。しかしそれは完全版ではなく、いわば草稿とも呼ぶべきものであった。またそれは、驚異に対する一般人の好奇心と、東方のことを知りたいフランチェスコ会士の要求に応えたものであった。こうしてできたのがグリェルモの第1版である。その後すぐオドリーコのアヴィニョンへの出発、ピーサでの病氣、ウーディネへの帰還、そして翌年1月の死と続いた。また死後すぐ多くの奇跡が認められた。そこでH版の後書きにある「アクイレア総大司教」が、オドリーコを福者に列することの要請を教皇庁に申請し³⁰、その時原本の写しを添えて送った。それを見たのが、そのおり聖庁にいたハインリヒであり、彼はそれを転記した。したがってH版のほうが、少なくとも内容の点ではより原本に近い。しかし彼はそれをそのまま表に出したわけではなく、故郷グラルスカプラハに持ち帰り、9年後の1340年により洗練されたラテン語に書き直して発表した。一方グリェルモも、オドリーコの死後いつかの時点で編集し直した。その第2版が今に伝わるグリェルモのG版である、と。

この推定の一つの根拠をモナコは、「大カーンとの出会い」がH版では、グリェルモではなくマルケジーノ・ダ・バッサーノがオドリーコから聞いた話と明記されていることに求める。ハインリヒはオドリーコとは直接の面識はなく、表現・文体はともかく内容まで勝手に手を入れる権利はなかったはずである。とすればマルケジーノの名は、最初なかったのが後で付け加えられたよりは、最初あったのが後で削られた可能性の方が高い。もう一つは逆に、G版の「後書き」では、旅の報告がパドヴァの管区長グイドットの命によりなされたとなっているのに対して、H版にはその名がないことである。これも最初はなかったのが、後で付け加えられた。つまり、グリェルモは単に最初の筆録者であり、最終的な編纂はパドヴァの修道会本部とその長グイドットのもとでなされたと見られる。

これら二つのグループのラテン語テキストとその俗語訳に対して、近年「Memoriale Toscano トスカナ覚え書き」と呼ばれる一群のイタリア語テキストがある。この第三のグループ(以下MT)は七つの写本と三つの刊本からなる。ラテン語テキストは一般に「Relatio 報告記」と呼ばれるのに対して、「Memoriale 覚え書き」と称されるのは、作品がその語で呼ばれているのと、要約されさらに簡略になったその形をよく示しているためであり³¹、「toscano トスカナ」は、トスカナ方言訳でありもっぱら同地方で広まっていたためである。かつてこのグループは、ラムージョの『航海と旅行記』に収められている二つのテキストのうち、「小ラムージョ版」と通称される二番目のものによって代表されていたが、近年同グループの他の写本がいくつか発見され、それらとの照合の結果、小ラムージョ版は後半が欠落しているうえ、内容が大きく改変されていることが明らかとなった。同グループの写本の一つ、フィレンツェ・パラティーノ稿はユールの英訳本に付録として刊行されたが、写本の方はその後行方不明になっている。最近ヴァチカン図書館写本が

モナコによって刊行された³²。

このグループのテキストは、G・H両版と較べていくつかの省略がある一方、それらにはない興味深い多くの新記事を含んでいる。が、基本的・全体的にはラテン語版によく沿っており、そのイタリア語要約と考えられる。ハインリヒよりはグリェルモのテキストにより近い。しかし、誰によっていつ頃どのようにして作られたかの手掛りは何もない。

全体的に縮約されたことからくる個々の語句や文の脱落以外には、小さなものとしては以下の記事を欠く：アララト山の登山禁止、乾いた樹、カルデアの男女の風習、オルムズの船、中国女性の纏足など。まとまったものとしては二つの大きな記事を欠く。一つは、ラテン語版では大きな比重を占めていたタナでの4人のフランチェスコ会士の殉教譚である。このテキストでは、「私はこの地で、彼らの話に語られるごとく、4人のフランチェスコ会士を殺した人々とその場所を見た」と、他人ごとのごとく記されるだけである。ただ、その遺骨をオドリーコ自身がザイトンに運んだことは同じように記されている。

もう一つは最後の部分で、真実を語ることの「宣誓」はあるが、「大カーンとの出会い」のエピソードと編者の「後書き」はない。それに代わって、「日に日に私はかの地に戻る用意を整えており、そこで神の御心のままに生き死すつもりである、アーメン。了」(57)の一文で終わる。前にみたごとく、4人のフランチェスコ会士の殉教譚も大カーンの出会いのエピソードも、おそらく最初の口述時ではなく、後の何らかの段階で加えられたものである可能性が強いことから、これらの欠落はこのテキストの成立をうかがう一つの手がかりとなる。

一方、新たな記事としては、まず出だしが異なる。最初に引用したラテン語版の序文が、いかにも編纂時に付けられた儀式ばったものであったのに対して、ここでは序文はなく、「我らが主イエス・クリストの1318年、私パドヴァの地の小兄弟団のオドリーコ・ダ・フリーゴリ修道士は、同地を発ってコンスタンティノーブルに来たった¹³³と、すぐ旅行記の一部として始まる。この1318年という年次が信頼すべきものであることは、前にみた。

個々の新記事は数多い。ザンガ(トルコ)の水晶と銀鉾、売春婦の僧院、紅河とアレクサンデルとダリウスの戦闘、タブリーズとスルタニーアのフランチェスコ会とドメニコ会の修道院³⁴、カルデアの結婚式、オルムズの葬式、タナの拝火教徒、タナの結婚式、人間がなるワクワクの樹、ラモリ人の衣裳、スマトラの産物錫、パウケの吹き矢、その他珍しい果物や奇妙な動物などである。

これらが全てオドリーコの口述や記述になるものか、それとも別のところから取ってきて後に書き加えられたものかは確定できない。これら独自記事の由来については三つの可能性が考えられる。一つは、オドリーコのメモやノートあるいは口述の草稿あるいはそれらに基づく最初の概略的な版があり、そこにはこれらに記事が含まれており、MT版はそれに基づいて作られた。二つは、何らかの形、本文の中なりあるいは余白への書き込みの形ででもこれらを含んだ、今に伝わるG・H版よりより詳しいラテン語稿本があり、MT版はそれを基に翻訳・要約された。三つは、何らかの第三者、フランチェスコ会の同僚あるいは同行者によって自分たちの知識や体験をもとに書き加えられたか、編者や写字生によって他の情報源から取り入れられた、である。

ユールは、これらの多くが事実として正しく信頼できるものであり、他にそうした記事を含む典拠が見いだされないことから、パドヴァでの口述以前のオドリーコの話やメモから採られたものと考えた。ウینگアエルトは、グリエルモ版特に自分が底本として用いたアッジ写本を、それが最も古い稿本であることから最もオリジナルに近いと考え、俗語版については一切取り上げなかった。モナコは、序文の「1318年に出発した」との文が事実在即していることから、このテキストを全面的に信頼し、GとHのラテン語版よりも多くの記事を含む稿本に基づいて作成されたのではないかと見る。仮説として、GとHの二つのラテン語版の作成過程で抜け落ちたオドリーコの口述の本物の記事が、後にMT版の要約者が用いた稿本の中には残っていたか、余白に書き込まれていたのが写し取られたのではないかと考える。

一方省略は明らかであり、とりわけ宗教に関わるものが多く省かれているのに対して、各地の産物や政情など世俗的に有益な情報がよく残されていること、新記事は民族・地理・伝承・珍しい動植物など庶民に興味深いものであること、トスカナ方言訳であり同地方で作成されて出回ったと見られることなどから、ラテン語版が宗教界向けであったのに対して、これは主にトスカナの商業層向けに作成されたのであろう、と結論づける。

しかし、M・H両版とMT版の異なりのうち、前者にあって後者にはない大きな欠落についてみるならば、前者の「序文」がいかに編集上のものであること、「殉教譚」が極めて詳細・長大であり、内容的にも文体的にも他の部分と釣合のないこと、最後の「大カーンとの出会い」と「後書き」が、いったんオドリーコの旅行記が終わった後に付け足されており、しかも「宣誓」の終わった後に置かれていることからして、これらは、オドリーコの口述やメモに基づきそれを核にしているにしても、その後の編集過程で加えられ整えられたものであることは明らかとみられる。とすればMTが、それらをすでに含んだラテン語稿に基づきながらそれらを省略したのではなく、最初からそれらがなかった稿本に基づいた、という可能性もありえるのではなからうか³⁹。とすればそれはよりオリジナルに近い形のものだったことになる。

もしMT版に基づいたのがよりオリジナルに近い稿本であったとすれば、MT版にあってG・H版にない記事は、それにはあったのがG・H両版では後の編集過程で省略された、あるいは抜け落ちていったと考えられる。もしハインリヒがアヴィニョンに送られてきたテキストを内容的には忠実に転写したとすれば、これらがそこになかったことは考えられない。またもしオドリーコのものであれば、それ以前の草稿のようなものに含まれていた可能性もある。

いずれにしても以上は、これら独自記事がオドリーコのものであって、何らかの第三者、つまり同行者・同僚・编者・写字生等による加筆、あるいは他の旅行記からの挿入でないことを前提とする。しかし、同行者もあり、しかもフランチェスコ会という東方問題の専門家たちによって、ヴェネト地方という最前線で編纂されたことを考えるならば、その可能性も高い。オドリーコ旅行記のテキスト研究は、まだいくつかの稿本が刊行されただけであり、対校される写本も限られ大部分は手つかずのまま残っており、マルコ・ポーロにおけるベネデットのよう研究の出現が待たれる。

4. おわりに

奇妙な旅行記である。旅にあったのは1318年からとすれば12年、短い年月ではない。イブン・バットゥータとマルコに次ぐ。行程もユーラシア全体にまたがる。にもかかわらずその記録は、すでにみたごとくいくつかの地のメモ程度のものであって、詳細正確なものでも体系的なものではなかった。東方世界の全体的地理と歴史の記述も、あるいは人間と社会についての深められた考察もみられない。

次に、筆者は聖職者であった。にもかかわらず、自分自身が行ったであろう活動だけでなく、各地での布教の状況についても報告は一切ない。唯一の例外はインドでの4人のフランチェスコ会士の殉教のいきさつを語った長い一章であるが、この部分が後の編集段階での追加が強く疑われることはすでにみた。また、3年間滞在したカンパルクでは、最晩年にあるとはいえ精力的に活動していた大都大司教モンテコルヴィーノがまだ生存していたはずである。が、彼およびその他同僚への言及も一言もない。これまた唯一の例外が最後の大カーンとの出会いの一章であるが、これとてエピソードのようなものであるし、やはり後の追記であることが疑われた。さらには東方の宗教についての考察すらなかった。

さらに不思議なのは、明記されてあるごとくこれが、パドヴァ管区長グイドットの命によって口述され、同僚の修道士によって筆録・編集され、しかもアヴィニョンの教皇のもとにまで提出された、いわば半公式の報告書であることである。にもかかわらずその内容は、すでにみたごとく、各地での奇妙なもの信じ難いこと驚くべきことなど、もっぱら世俗的な興味を中心となっている。

なるほど中国についてはある程度まとまった記録となっているが、それとてもっぱらグラン・カーンとその宮廷の富と権力、つまり世俗の側面を強調するものであった。また、マルコ・ポーロの旅行記を下敷きにしていることも明らかだった。最後に二つ、帰路の内陸アジアで、フランチェスコ会士が悪魔祓いを行って多くの信者を獲得したことと、恐怖の谷でのオドリーコ自身の体験が語られるが、これまた取って付けたようなエピソードであり、かえって報告記全体の価値を低めている。1世紀近くも前しかもわずか2年足らず東方にあっただけのかつての先輩たち、情報収集という明確な任務に答えるカルピネの報告記、マルコに優る詳細精密なルブルクの東方記とは比較にならない。ではこれはどのように考えるべきなのであろうか。あるいは、オドリーコそれとも修道会に何らかの意図が隠れた事情があったのであろうか。

ユールはこの原因をオドリーコ本人に求める。精神的にも知的にも劣っていた、と。が、そのような人物が長期の東方行という大役に選ばれるものであろうか。次に、帰国時にはもう高齢なうえ長旅に疲れ病身であり、長時間の口述や報告には耐え得なかった、と。これは大いに有り得よう。すぐ病に倒れて亡くなっている。が一方では、何人かの修道士を率いて再び東方に向かう許可を得べくアヴィニョンの教皇のもとに向かおうとしていたほどだった。また、メモやノートはなかったのであろうか。旅行中メモを取らなかったとは想像し難いし、他の資料を持ち帰らなかったことも考えられない。それらから編纂することはできなかったか。もっとも、途中あるいは帰路に失ったことは考えられるが³⁶。さらに、筆録者に恵まれなかった、と。確かに、ジェノヴァの獄で優れた職業作家を同囚に

もったマルコの幸運は手にしなかった。しかし、筆記や編集に当たったのはグリェルモ・ダ・ソラーニャではなかったはずである。がそれが誰であったにしても、オドリーコ自身の口述の元の内容まで根本から変えることはできなかったであろう。9年後に別の編者によって編まれた版が基本的に同じものであることが、それをよく示している。

ウィンガルトは、もっぱら観察を好むという性格や中世人の傾向に求めるが、もちろんそれだけでは納得し難い。

一方近年メリスは、これはオドリーコの旅の目的に沿った意図的なものであった、という³⁷。彼は、中国とそれ以外の地域の記述には明確な差のあることに注目する。とりわけインドと東南アジアでは、未開で野蛮な忌まわしい現象ばかり取り上げ否定的であるのに対して、中国では肯定的である。中国人の生活と風習はヨーロッパ人と似ており、時により裕福で発展している。中国でも奇妙な風習や不合理な現象を取り上げるが、非難や攻撃は控えている。死者への食べ物のお供えや輪廻といったキリスト教教義に抵触するような問題においてすらそうである。皇帝賛美、社会制度の賞賛、カソリック布教に対する皇帝の好意と支援の強調、つまり、中国を意図的に美化している。メリスは、ここに政治的な意図がはたらいていると見る。国土の繁栄と信仰の自由と布教財政援助に対する皇帝の気前よさを讃え、それをヨーロッパの関係者に知らせ、中国布教への理解と支援を求めようとした。そもそもオドリーコの東行も、個人的動機の外に、中国の宗教動向とフランチェスコ会の状況について情報を集めるという半公式的な任務が会から託されていたと推測され、布教だけならカンパリクにわずか3年留まっただけで帰国することは考え難い。また、50人の修道士を率いて再び中国に渡りたいとの言も信頼できる、と。

中国とインド・東南アジアの描写の差は明らかだし、皇帝と帝国の賛美もそのとおりであり、宗教上の政治的・外交的意図がはたらいていることも確かだし、そうした任務が託されていたであろうことも充分予想される。が、たとえそうであったにしても、その報告記がこのようなものであらねばならない理由はない。中国布教の宣伝と強化、フランチェスコ会の活動への理解と支援を求めるのが報告の目的なら、そうした記事を欠いていること、そうした視点から書かれていないことこそがこの報告記の特徴ではなかったか。もっぱら驚異を語るという、なぜ回りくどい手法を取らなければならなかったのか。他の書類が別にあったかもしれないということは誰しも想像するが、失われたのかまだ明るみには出ていない。それに、一年後にアクイレアの総大司教から聖庁に送られたのはこの報告記だったということは、これが主たるものであったことを示している。

これに対してモノコは、「宣誓」に「ヴェネト地区の修道会長グイドットの命により口述した」とあることに注目し、それら個人的資質や事情の外に、修道会の介入を見る³⁸。オドリーコは膨大なメモやノート、資料や材料を持ち帰ったであろうが、それらを統一的観点からまとめる時間と体力はなく、思い出すままに口述した。1330年おそらく春頃の帰国、5月のパドヴァでの口述、さらにすぐアヴィニョンへの出発、ピーサでの病気、ウーディネへの帰還、そして翌年1月の死と、短く慌ただしい経過がそれを物語っている。オドリーコもまた、旅行記を書くよりは、今度は多数の修道士を連れて再び東方布教に旅立つことを急いだ。その結果草稿は中途半端で不満足なものとして残り、そのまま出すわけ

にはいかなかった。そこで教団本部は、その原稿をマルコに代表される当時の旅行記のモデルにのっって並べると同時に、それにインドでのフランチェスコ会士の殉教譚やその遺骨によるオドリーコ自身の体験した奇跡、中央アジアでの悪魔祓いや恐怖の谷での体験、そしてグラン・カーンとの出会いのエピソードなどを、当時の聖者伝をモデルに組み込んで編纂した。こうして地理と商業案内、民族と風習、数々の現世の驚異が、聖者伝と結びついてキリスト教信仰の驚異の書ともなってしまった。個々の題材も宗教的・政治的観点から配され、インドと東南アジアを否定的に描き、中国を持ち上げ、その頂点にあるカンバリクと皇帝に向かって上昇して行くように並べられている。そして最後に異教徒と悪魔に対するキリスト教徒の勝利を配して、「これら多くの驚異の中で最終的に摂理によるこの世の秩序が肯定される仕組みになっている」と結論づける。

編者修道会の意図と編纂がたとえそのようなものであったにしても、それにしてもなぜオドリーコの材料ががあのようにもっぱら世俗的な性質のものであったのかは分からない。ところがその書は、教団側の狙いよりはこの修道士の残した内容ゆえに成功をみることになる。この旅行記が広く人気を呼んだのは、他の聖職者たちの書のように専門的・宗教的なものではなく、世俗的な驚異を単純にわかりやすく並べたものであることが、一般読者の興味に容易に受け入れられたからであった。第3グループのMTテキストが、それら宗教的要素を多く省き、民俗的・風土的なより興味深い記事を加えたものであったことが、その一端を物語っている。最初に引いたボッカッチョ『デカメロン』のチポッラ修道士の話もまた、そうした性格のものであった。

注

1. 下記を用いた（[] 内略称）：

I. テキスト（MSは底写本）

A. ラテン語版

- (1) Anastasius Van den WYNGAERT, *Sinica Franciscana*, vol.I, Firenze Quaracchi Collegio S.Bonaventura, pp.413—495 [SFまたはWyngaert]. MS: Assisi, Biblioteca Comunale, 343(20). (G版)
- (2) Teofilo DOMENICHELLI, *Odorico da Pordenone*, Camera di Commercio, Industria, Artgiano e Agricoltura di Pordenone 1982, pp.73—120 [Domenichelli¹]. Prato (Ranieri Gusti) 1881の復刻版. Marcellino DA CIVEZZA, Roma 1859の再刊. MS: München, Bayerisches Staatsbibliothek, Lat.903 (1422年). (H版)
- (3) Henry YULE — Henri CORDIER, *Cathay and the Way Thither*, vol.2, pp.278—336, London Hakluyt 1913 (初版1866) [Yule¹]. MS: Paris, Bibliothèque Nationale, F Lat.2584. (G版)

B. イタリア語版

- (4) Giovanni Battista RAMUSIO, *Navigazioni e Viaggi*, a cura di M.Milanesi, vol.4, pp.269—303, Torino Einaudi 1980 (初版1574). [Ramusio¹] G系写本(明記なし)のラムージョによるイタリア語訳。
- (5) G.B.RAMUSIO, Idem, pp.305—318 [Ramusio²]. MT系の1写本(明記なし)。
- (6) T.DOMENICHELLI, Idem, pp.9—70 [Domenichelli²]. MS: Venezia, Biblioteca Marciana It.5726 (VI.102). (G版)
- (7) YULE—CORDIER, Idem, pp.337—367 [Yule²]. MS: Firenze, Biblioteca Nazionale Centrale,

Palatino E.5.9.6-7. (MT版)

- (8) Lucio MONACO, *Memoriale Toscano*, Alessandria Orso 1990 [Monaco]. MS: Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, Barberini lat.4047. (MT版)

C. 英語版

- (9) YULE-CORDIER, Idem, pp.97-277 [Yule³]. (7)の英訳に他の主要写本・テキストから異文を補ったもの。

D. 日本語版

- (10) 家入敏光訳『東洋旅行記』光風社 1990 [イエイリ]. (1)と(9)の和訳。

II. 研究書・論文他

- (11) Vita fratris Odorici de Utino, <*Analecta Franciscana*> III, pp.499-504, Firenze Quaracchi 1897 [Vita].
- (12) A.C.Moule, A life of Odoric of Pordenone, <*T'oung Pao*> vol.20 1921, pp.279-90 [Moule¹].
- (13) A.C.Moule, A small contribution to the study of the bibliography of Odoric, Idem, pp.301-22 [Moule²].
- (14) L. Monaco, I volgarizzamenti italiani della relazione di Odorico da Pordenone, <*Studi Mediolatini e Volgari*>, vol.26 pp.179-220, Pisa Pacini 1978-79 [Monaco¹].
- (15) *Odorico da Pordenone e la Cina*, Atti del Convegno Storico Internazionale, a cura di G.Melis, Pordenone Concordia Sette 1983 [Atti].

この小論ではGテキストは(1)、Hテキストは(2)、MTテキストは(6)に依り、他を参照した。

2. 拙稿「ボッカッチョ『デカメロン』の東方」<大阪国際女子大学紀要> 23-1 1997, pp.28-31.
3. 『デカメロン』で舞台がカタイ(中国)に設定されている、二人の富豪ナータンとミトリダネスの鷹揚さ比べの話(第10日第3話)での、ナータンのとてつもなく豪壮な屋敷は、オドリコがマンジで招かれたという「驚くべき富者」の御殿(第34章)を参考にしたことも考えられる(cfr.前掲拙稿pp.24-25)。
4. < >内の文はSFではなく、Domenichelli¹から補ったもの。
5. 引用は、特に記さない場合は全てSFより。()内数字はその章。人名・地名は近代語読みに記した。[]内は訳者補足。
6. 紙数の関係上、詳細と記述例は略する。
7. 殉教は1321年4月9日と11日。Tommaso da Tolentino, Giacomo da Padova, グルジア人在俗修士Giorgio, 神学士Pietro da Sienaの4人。ドメニコ会士Giordano di Severacは別の村に布教に行っていて難を逃れ、後で4人の遺骸をS.Tommaso a Supera教会に埋葬した。Tommasoについては、1290年小アルメニアに派遣され、1292年には同国のヘトゥム2世により支援を求めて英仏に遣わされたこと、1307年にはモンテコルヴィーノの手紙をもって聖庁に来たこと、などが知られる(Yule:118 n.8)。この事件に関連するGiordanoの2通の手紙(1321.10.12, 1324.1.20):Yule, *Cathay*, vol.3 pp.75-80.
8. その後の一例として、1339年アルマリクでの7人の修士と1人の商人(ジェノヴァのグリエルモ・ダ・ムティナ)の殉教がある(SF:510-1, イエイリ:147-8)。
9. SF:365-8, イエイリ:27-31.
10. SF:342, イエイリ:7.
11. 次の東方使節マリニョッリはなお地上楽園を探索している(『ボヘミア年代記』Yule:209-69, SF:524-60, イエイリ:151-74)。
12. Ramusio²(pp.315-6)では、カンバリクの宮廷にもヨハネスの宮廷と同じく、「6本足の馬・双頭の駝鳥・野生人・全身毛に覆われた女・小びと・一つ目人・巨人」らの怪獣・珍獣が登場する(Wyngaert:475-6, Domenichelli:54-5, Melis:226-7)。ユールはこれを、加筆の疑いが濃い事実を述べたものと見る(Yule:229-30 n.4)。

13. その他Buscarello di Ghisolfo(G), Guicciardo de'Bartori(F), Tomaso Ughi(S), Pericciolo Bofeti(P), Caterina Viglioni(V), Franceschino Loredan(V)ら多くが知られるが、いずれも手記は残っていない。これからも、作家ルステイケッロを同囚に得たマルコ・ポーロの場合がいかに幸運な例外であったかが分かる。
14. A.Müller, *Marco Polo*, Berlin 1671, pp.i-iii.
15. 写本は、マルコやオドリーコよりも多い約300が今に伝わるとのこと:cfr. 福井・和田監訳『マンデヴィルの旅』英宝社 1997.
16. Vita:497-504, Yule-Cordier:3-39, Moule¹:275-90, Wyngaert:381-5, Monaco:21-79.
17. Cfr.Wyngaert:381.
18. Vita fratris Odoriciは、最初*Chronicon XXIV Generalium* (c.1370)に記載されたもの。
19. 公証人Simone SimonettaによるPorpettoの1317年3月23日付けの一記録に、二人の修道士が証人として登場し、その一人がOdoricus da Portunaoneと署名しており、同一人物と見られる(Monaco:24)。東方滞在を「14年」あるいは「14年半」(Yule³)と記すテキストもある。Ramusio²では出発は「1318年4月」。
20. オドリーコが布教活動について何も記さないのは、当時修道士会内にあった厳格派と穏健派の対立(オドリーコは前者)のためであろうとの説もある:cfr. Paul P.Pang, *Il cristianesimo cinese nel secolo XVI*, Atti:85-100.
21. 「オドリーコ修道士よ、聖庁には行かずともよい、私が行って話をつけよう。だからそなたは戻り、そなたの巢に帰るがよい。そしてそこで没するだろう。この市はそなたの死を迎えるにふさわしくないのだから」(Vita:502)。
22. ニコラウス5世がピーサを離れてアヴィニョンに向かった時期ははっきりしないが、当時の年代記によると、ヴィッラーニでは「1329年9月」の記事に、ピーサ市民によって「アヴィニョンの教皇ジョヴァンニのもとに送られた」(Villani, *Cronica*, tomo V pp.186-7)。ロンチオーニでは、1329年の記事に、4人の使者が4隻のガレー船で教皇のもとに送り届け、「11月にアヴィニョンに着いた」(Roncioni, *Istorie Pisane*, vol 2 pp.754-7)。とすると、オドリーコが来たであろう1330年夏頃には、ニコラウス5世はもうピーサにはいなかったことになるが、その退位は1330年8月25日とされ(Lucio Monaco, *I manoscritti della <Relatio>: problema per una edizione critica*, Atti:116)、それまで時間が空きすぎる嫌いがある。ユールによれば、この対立教皇は首に縄をつけて出頭し、教皇に許しを乞うた(Yule:12)。その後3年間アヴィニョンにあってそのまま死亡した。(Cfr. 拙稿「中世ピーサ年代記」(二)本誌24-1 1998 pp.158-9)
23. 棺はChiesa del Carmine、壁画はChiesa di San Francisco。壁画でもかなり高齢に描かれている。Domenichelliに写真あり。
24. Yule:39-93, Wyngaert:386-412, Giulio Cesare Testa, *Bozza per un censimento dei manoscritti odoriciani*, Atti:pp.117-150. Testaは、Wyngaertの98にラテン語(23)、イタリア語(6)、フランス語(2)、ドイツ語(4)、その他(4)を加え、さらに「行方不明・假定・同定すべきもの」(44)を数えている。ユールによれば、同じものは二つとない。ポーロ写本の場合と同様である。
25. Glars (Glatz, Clatz)は、モナコによれば現Klodzko (Monaco¹:180)。
26. ユールはラテン語版を三つに分け、Hakluytの英訳(1599年)の典拠となった写本(London, British Museum Library, Royal Coll.14.C.XIII)らを1グループとする(語句・表現ともG-H両版と大きく異なる)が、そうした分類が可能で必要か、今では疑問視される。
27. 章立ては版によって異なる。各版の章数字をそのまま記す。
28. 他のG版ではこの後に、「日に日に私はかの地に赴く用意をしており、そこから全ての善きものがきたる御方の思し召しにかなうなら、私はそこで〈生き〉死すつもりである」の一文があるが、Wyngaertはこれを採用していない。

29. Monaco:31-5.
30. 公証人Guecelloを長とする委員会が多くの奇跡を記録し、その中にアキレイア大司教Pagano della Torreを通じて市と司教から教皇に提出された列福要求の文書が含まれる。
31. 最終章(57)「真実であることの証言と物語の結び」:「私フリウーリの修道士オドリーコは…このmemorialeの中に書かれてあることは全て、自分の目で見たもの…であることを証言する」(Monaco:143)。MTは、14世紀後半の作と見られる。
32. MT系テキストには、1513年PesaroでユマニストPontico Virunioと印刷者Gerolamo Soncinoによって出版された*Odorichus de rebus incognitis* (Pordenone 1986に再刊)がある(未見)。Ramusio²は、これに用いられた写本に近いものからのテキストといわれる。
33. ヴェネツィアからトレビゾンダへの直行便の開始は1319年であることから、G Hでは直接「トレビゾンダ」に着いたとあるのに対して、MTではこのようにまず「コンスタンティノープル」に着いたとなっていることも、同テキストの信頼性の一つの証とされる。
34. タブリーズとスルタニーアの修道会院は1318-20年頃の創建になり、史実と一致する。スルタニーアは1318年(4.1)ヨハネス22世によって大司教区とされた。
35. MTのタナの章(16)には、「この地で私は、彼らの話に語られているごとく、4人の小兄弟会士を殺した人々と場所を見た」(Monaco:101)とだけあって、殉教譚はないことから、このく彼らの話に語られているごとくをモノコは、MTの要約・翻訳者がその話を省いたことの但し書きと見る(Monaco:24)。
36. 前掲*Odorichus de rebus incognitis*には、帰路4カ月病の床にあり、連れの者たちによってネグロポンテに運ばれ、「船に残っていた者たちが彼に語った多くの驚異を失った」ことが記されているとのこと(G.Melis, Atti:228 n.21)。
37. G.Melis, ibid.:203-10.
38. L.Monaco:31-63.